

## 北向き地藏さん（生田区）

「このなが雨で、大水が出にやええがのう。」  
「去年も秋のあらしで川の土手がきれて、田んぼがわやになつてもうて（だめになつて）なんぎしたのに、つづけて米がとれなんたらどないしたらええんや（どうしたらいいの）か。」  
「ほんに、土手でもきれたらえらいこつちゃで（たいへんなことだ。）」  
生田（いくた）村の人たちは、昔からなんども大雨のたびに土手がきれて、あふれた水が流してきたどろや砂で、田をだめにされてきました。雨の中で、きているみの（・・）やかさ（・・）からしずくを流しながら、村の人たちが心配そうにまっ黒い川の動きを見て、話し合っていました。

「なまこが流されたぞーっ。」  
なまこというのは、竹であんだかごの中に石ころをつめてつくったものです。川の土手から流れの中につき出すように川ぞこにつくられるものです。これで水かさが増して、土手までおしよせる水の流れをやわらげたり、かえさせたりするものです。なまこがはたらいっているうちは、まだ川の水が土手をつきやぶることはありませんでした。そのしるしに、なまこに竹ざおをたてて、その先に白いぬのをしぼりつけておくのでした。大きな木や石が上流から流されてくると、なまこがつぶれて、竹ざおもたおされてしまうのでした。  
村人たちは、夢中で前の年にこわれた土手のところへ走りました。十分にみんなで石をつみ、土をかためてなおしたのですが、心ばいになったからでした。



「またか、あなができかけとるぞ。」  
「早う（はよう）、手あてを。」  
「ようしようじゃ。早う、土俵（どひょう）をつくれ。」（土をわらにつめて土俵をつくり、土手につみあげたりして、こわれかけたところをつくろうこと）村の人たちは、雨の中でくわをふるい、土をつめ、土俵をはごびました。

「ホイサ。」「コラシヨ。」  
いせいのよいかけ声とともに、どんどんあながうずめられていきました。

「これで、もうここはだいじょうぶだ。」  
ほっとして、村の人たちがやれやれとこしをおろしかけたときでした。  
「上（かみ）の方が、あぶないぞー。」

というさけび声が聞こえてきました。みんなは、「それっ。」と走っていきました。雨は止まない（やまない）し、その上風も強くなってきました。



ときどき遠くでピカッといなびかりがし、ゴロゴロというかみなの音もしました。はじめ元気だった村の人たちも、だんだんにつかれてきました。夜中をすぎるころには、みんなへトへトになってしまいました。見はり小屋の中でゴロねをしていましたが、こんどどこかがぐずれかけたら、もうだれも元気にはたげないくらいでした。  
ゴオーツという大きな音といっしょに、山から流されてきた大きな木があたったのか、やつとのことでなおした土俵のあたりで、ドスツ、ドスツ、とじびびきがしました。きつと大きなあながあきかけて、土手が切れかけたにちがいありません。

「土手が切れかけたぞー。」  
「流れてきた木がぶちあつたわ。」  
小屋の中で、だれかがさげんだけれど、だれもおきあがる力のないようころがったままでした。

「ああっ！」  
「だめだー。土手が切れるうー。」  
と、頭をかかえてすわりこんでしまった人もいました。オイオイなき出した人もいました。またことしも田が流されてしまうのかと、みんなが思ったときでした。

「ドスン。ドスン。ドスン。」  
という大きな足音が近づいてきました。ズーツ、ズーツ、という重いものをひきずるような音もしてきました。村の人たちはびっくりして、こわくてふるえあがりしました。口がパクパクしたが何もいえないままでした。だれも戸をあけて見ようともしませんでした。

「ザブーン。」「ザブーン。」とつづきさまに、石でもなげこむような大きな音がしました。しばらくすると、シーンとなって水の流れがかわったようにしずかになっていきました。それでも、村の人たちはだれも小屋から出ようとせず、しんじょうにねむってしまいました。

夜が明けたとき、村の人たちはそろそろおきだして土手へあがっていきました。たすかったのがふしぎでした。川の水は半ぶんぐらいにひいていました。小さな木が岸にひっかかっていた。もう少して土手が切れるところまで水がきたことがわかりました。

「あぶなかったのう。」  
「そうじゃ。すでに土手が切れたと思うたにのう。」  
「それにしても、あの音は何じゃったんかのう。なんぞ重いもんでもかついでいくような音じゃと思つたが。」  
「それよ。わしら、みんなのびてしまつていたからのう。」  
「もう。土手がもたんと思つたときじゃったのう。水がぐんぐんひいていくみたいじゃった。」  
「けつたいなこと、あつたもんじゃ。」

口口にいいながら、ふと見ると、小さなお地藏さんが目につきました。だれが投げ入れたか、ごっそりと川の水にえぐりとられたあなに石がぎっしりとつまり、その一ばん上に土俵が二つおいてありました。その上にちょこんとお地藏さんがのっているのです。

「おお、地藏さんじゃないか。」  
「ほう。こんなところに、のう。」  
「この地藏さんかどうかわからんが、大きな黒いかげを見たというものもいる。」  
「みんな、音はたしかに聞いた。」  
「うん。そうじゃ。」  
「なんせ、この地藏さんにかかわりのあることだ。そまつにすればちががあたるぞ。」  
「おまつりしてはどうかいの。」

「そうじゃ。村でおまつりするのがいちばんじゃ。」  
と、いうことで、生田神社のはずれにあたる川べりに小さなお堂をたてて、そのお地藏さんをまつることになったということです。村の人たちは、お地藏さんがすわっていたところへ向けて、おまつりをしたので北の方を向いておまつりすることになりました。昔はなんでも「ふたぎ地藏さん」といういたので

そのですが、いつのころからか「北向き地藏」というようになったということです。  
その後、生田川が明治になってつけかえられるようになりました。新しい生田川がつくられて、もとの生田川の川のすじは、土手をけずったり川原をならしたりして「加納（かのう）町」になりました。今では広い道路や街になり、神戸市の中心になっています。それでも地藏さんだけはのこって、お花や線香のたえることもなく、まちの人びとがおまいりをしています。

